

地域と協同の

2016年10月25日発行

146号

研究センターNEWS

巻頭エッセイ

三重地域懇談会(三重のつどい)の活動から

森下 智氏 (コープみえ執行役員・研究センター常任理事)

研究センターの三重地域懇談会(三重のつどい)では、昨年度に「環境・エネルギー」をテーマに取り上げ、地域での様々な取り組みが、地元地域の資源を活かし、その地域へ還元していることや、地域貢献・地域の活性化につながっていることなどを学びました。今年は、「地域福祉」をテーマに取り上げて活動しています。中でも、今、話題になっている「貧困問題」について学ぶため、県内で「子ども食堂」の活動をされているところへお邪魔し、活動の立ち上げに至った思いや経過などのお話を伺ってきました。

近年、私たちの暮らしを支えてきた地域のコミュニティは崩壊しつつあり、行き過ぎとも思える自己責任論とともに“暮らしにくい社会”になってきているのではないのでしょうか。三重地域懇談会(三重のつどい)でお話を伺ってきた「子ども食堂」では、こうした現在の社会の状況に対して、自分たちの意思や力でコミュニティを再構築しようという活動を開始されてきています。人が生まれ育った土地で安心して生活し続けていくために、小さなコミュニティは必要不可欠なものではないのでしょうか。三重地域懇談会(三重のつどい)での活動を行う中で、こうした取り組みの芽がたくさん出来始めていることがわかってきました。

三重地域懇談会(三重のつどい)では、このように自分たちの住んでいる地域について知り、考え合い、学んだことを知らせる活動をすすめています。

研究センターでもこうしたセンターの取り組みを多くの皆さんに知っていただき、会員になっていただく活動を行っています。多くの方々の活動への参画とともに、新しい会員のご紹介も合わせてよろしくお願い致します。

CONTENTS

【巻頭エッセイ】	1
三重地域懇談会(三重のつどい)の活動から	
【政策提言第2回公開学習会報告】	2
協同組合は地域にどう関わるか〜食と農を支える消費者と生産者	
【研究フォーラム食と農報告】デイリーファーム(愛知県常滑市)を訪ねて「知多半島の循環」	4
【情報クリップ】	5
【企画紹介】	8
「若者を『使い捨て』にする国に未来はない」講演会	
【書籍紹介】おひとりさまの最期(著者:上野千鶴子)	

研究センター 10月の活動

10月1日(土) 政策提言チーム会合
10月3日(月) NEWS編集委員会
10月4日(火) 研究フォーラム食と農「デイリーファーム」視察
10月6日(木) 研究フォーラム職員
10月10日(月) 共同購入マイスター④
10月11日(火) 岐阜地域懇談会「ひなたぼっこ」事前訪問
10月13日(木) 常任理事会, 三河地域懇談会・世話人会, 三重地域懇談会(三重のつどい)・世話人会
10月17日(月) 尾張地域懇談会・世話人会
10月18日(火) 研究フォーラム地域福祉
10月20日(木) 岐阜地域懇談会・世話人会
10月27日(木) 組合員理事ゼミナール第2回
10月28日(金) 生協の(未来の)あり方研究会
10月29日(土) 政策提言チーム会合

9 月 17 日 (土) ・ 政策提言第 2 回公開学習会 「協同組合は地域にどう関わるか～食と農を支える消費者と生産者」

研究センター「政策提言」検討のため、9 月 17 日 (土) に食と農をテーマに、生協と農協が地域でどのように連携するか、組合員 (生産者・消費者) の役割やあり方はなにかを考える公開学習会を開催しました。

講 師 茂木穰さん (東海コープ事業連合) ・ 村上光男さん (JA 愛知中央会)
助 言 近藤充代さん (日本福祉大学教授・研究センター理事)

一、報告 1 「事業をとおして消費者と生産者を結ぶ」 (東海コープ事業連合 茂木穰専務理事)

1. 東海コープのコープ商品等の扱い基準について
2. 生産者・メーカーとの信頼関係づくりと課題
 - ①より良い商品のより良さを伝えるのが難しい。
 - ②より良い商品をより安くは難しい。
 - ③社会の変化。食品の安全基準の変更をどう商品に盛り込むか大事な問題。
 - ④規模が大きくなるにつれ生まれる新しいリスクへの対応 (複数産地によるリスク分散)。
3. 社会的取組
 - ①単位生協と農協・漁連のパイプはあるが、事業連合と全農・経済連の取引となっている。社会的取り組みを進めるには協同組合間提携に事業連合と単位生協が一体に取り組むことが必要。
 - ②自分たちの暮らしがよければ、というレベルでとどめていいか? 社会的に広げ、行政施策に反映する、より良い地域づくりが大切。内部の組合員活動も大切だが、社会的役割、外部との関係づくりを。

一、報告 2 「食と農の協同組合づくり」 (JA 愛知中央会 村上光男地域振興部長)

1. JA は消費者と生産者のつながり強化をめざしている。愛知県の特徴は農産物直売所が全国 1 位 (475 億円) で生産と消費が近い。農産物直売所 300 の中で 106 が農協店舗。産直出荷者の確保が課題。農業塾の開設。学校給食での地場農林水産物の利用は、全食品数に占める割合で平成 27 年度は 40.5%。JA 愛知中央会では、栄養教諭に愛知県農業

を知ってもらう圃場見学。学校給食会と JA で「ミカンゼリー」を開発。通年型農業体験。愛知東こども農学校。出前授業など行っている。

2. 食と農の協同組合間連携
 - JA とコープあいちの関係では、市場経由と産消提携商品で経済連・事業連合が間に入っている。9 つの JA がコープあいちと交流している。取引の安定性、効率化からは経済連・市場経由となるが、かつてと比べ食と農の距離がひろがっていないか。交流会で消費者は産地や生産者を応援する気持ちになっているか。生産者も交流を進めようという気持ちになっているか? 一過性であれば改善の余地がある。愛知県の「食と緑が支える豊かな暮らしづくり条例 (平成 16 年 4 月 1 日制定)」では、生産者と消費者を生活者として位置付けている。
 - ②地域農地が荒れて、商店街がさびれると、地域のくらしがさびれる。食を守る、農を守る、景観を守るためには売買関係から食と農を基軸とした「生活協同」が必要。そのためには、「組合間協同」から「組合員間協同」へ進むべきではないか。生活者から見た問題を「組合員間」で交流する場をつくる。今まで事業の協同から先に進めなかったが、本来は「組合員間協同」ではないか。具体的な結集軸は組合員間交流からでてくる。学校給食でも JA と栄養教諭が交流してミカンゼリーが生まれた。組合員間交流は小さな協同から大きな協同をめざす。

一、”食と農“を支える消費者と生産者—消費者の視点から 近藤充代先生（消費者法）

1. 地域社会の中での「消費者の権利」

○規制緩和的「消費者の利益」「消費者のニーズ」。消費者市民社会論での消費者市民とは自立的、自己責任が果せる強くて立派な消費者である。

○「消費者の権利」「消費者の利益」を捉えなおす。市場では消費者だが、同時に生産者、事業者、零細、住民でもある。「規制緩和的なニーズ・利益」を追求すると他方で生産者・労働者の首を絞める。「消費者の権利」は事業者、農林水産業、生業と矛盾しない範囲で主張されるべきで内在的制約がある。周囲に視野、優しい目を広げ、誰が作っているかと思いを寄せられる自覚的消費者に。

○「消費」の社会関連性を捉え直す視野が必要。持続可能な社会のための消費生活。狭い意味での消費を超えて格差社会のない、より良い消費生活のために。買うことで他人の生活を支える。

2. 消費者が変わる、消費者を変える—「自覚的な消費者」をどう育てるか？

○「組合間の安心、安全なくらしを守る生協」

1) 「持続可能な社会のための」（安心安全のレベルをアップすべきか？地元の農業をどう買い支えるか？その課題をどう解決するか？）

2) 生産者、生産組合との提携、協同。（買い支える自覚を持って、学び続ける組織であること。）

○地域社会に生活する消費者、住民であること。（震災復興、フードバンク、福祉基金、子ども食堂）

○学び合い、学び続ける組織（職員・組合員）が自覚的な消費者を育てる。組織の中で組合員と職員が学ぶ。

【意見交換から】

○組合員間の協同という話は感銘をうけた。豊川市では農協組合員の世帯カバー率が30%。（直売所では）農家のおかあさんたちも出荷に来て、消費者として買い物をしている。JA準組合員と生協組合員はだいぶ重なって

るように思う。持続的な地域づくりをするには主人公になれる人たちをうまく結びつけて、組織がバックアップしていればいいのかと思う。これからの農産物、商品の関わりも組合員どうしのつながりを前面に考えないと地域づくりに結びつかない。

○生協組合員が農協を取引相手としてとらえて、高ければ買わない、安ければ買うでなく、一緒に組合員活動で改善できないか。組合員教育を強化したいがどのように進めているか。

○生協組合員とJAの交流会によって消費者が応援する気になるかどうか。田植え、稲刈り交流会にたくさんの参加者があるが「生産者の思いがどうか？」まで思い至らなかった。近藤先生がおっしゃった学びあい、学び続ける組織が大事。親の世代から新しい方に伝えることも大事。

○子育ての中核の所得・生活を中心に捉え直さないといけない。団塊の世代以下の年金はひどい。農協、生協もそのことに優先的に手間をかける視点を持つことで、つながる目的が明確になる。

○「愛知県の食と緑が支える条例」は自覚的な消費者につながる。農林水産部門でもそういう取り組みがわかる方法を考えたい。

○新城に「Iターン」の農業者の話聞いた。生協は地域農業にどういうスタンスで関わるか。県内産直の量的な割合、価格の内訳・生産者の手取りなど、どういう関係が適切か、地域の中で協同組合の連携を考えるとときに大事。

【近藤先生のまとめより】

① 「組合間協同」から「組合員間協同」へ。これまでノウハウのない領域だが、お互い交流を強め、顔の見える関係を築き前に進める。

② 生産と消費が近い地域特性を生かす。

③ ベテラン組合員から子どもに継承される関係。

④ 条例・理解のある行政との連携も大事にする。

（文責：向井 忍）

【研究フォーラム「食と農」世話人会活動報告】

—デイリーファーム（愛知県常滑市）を訪ねて「知多半島の循環」—

研究フォーラム「食と農」世話人会は、飼料問題をきっかけに「農業—畜産業（養鶏）—鶏糞のたい肥化⇒食育活動・商業」のつながり・循環に、愛知県常滑市を中心に知多半島で挑戦している「(有) デイリファーム」を訪問し、代表の市田真新さんから取り組みに込める熱い思いをお聞きしました。

デイリファームは「コブあいち」のたまご生産者のひとつ。新規需要米（飼料米）を餌（飼料）に活用した「あいちの米たまご」を提供いただいています。

10月4日（火）、世話人6名と事務局3名で常滑市にある「GPセンター（養鶏と出荷場）」を訪問。昨年秋の火災消失から復旧した新鶏舎（8月に完成）、飼料米専用倉庫の移設（新倉庫）、鶏糞をたい肥化する作業を見学しながら市田さんのお話を伺った。飼料米は食用米との区分管理の問題から、デイリファームにて独自に専用倉庫を設置して管理されていた。

その後、事務所にて引き続きお話を伺う。東海コブ事業連合で始まった、飼料の「とうもろこしと大豆油粕のnon-GMO化」。生産者の皆さんの努力・意思・熱い思いを市田さんから伺えた。飼料原料のとうもろこしと大豆は世界レベルで90～95%はGMO（遺伝子組み換え）栽培と言われる。「体は食べものでできている。食べものは安全なものを」という市田さんの信念。そして、「この安全なたまごをいくらなら利用するか？」の問いかけに応えた組合員のお話だった。

「あいちの米たまご」は安全なたまご作り、飼料の安定確保をめざして生まれてきた。政府は一時期、食料自給率50%目標を掲げ、新規需要米栽培にも着目。補助制度も設置した。市田さんは鶏の飼料にお米（飼料米）を活用することで、海外依存型の穀物飼料の自給率（それも地域自給率）引き上げ、地域農業の活性化を考えた。しかし、補助制度があっても、飼料米を栽培する農家は簡単には見つからない。補助で経済的な問題は解消されても、農家は毎年買ってくれる⇒米たまご生産の継続性が心配。「活用し続ける決断」をした市田さんの思いに応じてくれた農家は、出穂以降は農薬を散布しない安全な飼料米作りにも努力してくれた。市田さんいわく「農家の皆さんには面倒なことばかりやってもらっている！」「あなたが農家ならやりたくないでしょ？」と。

地域の田んぼで栽培された飼料米が鶏の飼料となり、生産された「たまご」が消費者のもとへ。そして、鶏の糞はたい肥化されて飼料米の田んぼへ。田んぼには小学生が集まり、稲作体験。たい肥化の作業は地元中学生の労働体験の場につながった。食育・教育だ。

デイリファームの直営店「とれたてたまごの店 “ココテラス、”」に移動。デイリファームの「たまご」は市田さんの息子さん（獣医の資格をお持ち）がパティシエとなったココテラスで、プリンやカステラ、シフォンケー

キに生まれ変わり、地元の皆さんに愛されていた。商業にもつながった。—世話人もたくさんお買い物—



▲市田さん（中心）と「ココテラス」前にて

＜参加者の感想を紹介＞

- 説明の時間がいくらあっても足りないくらいの市田真新社長の「食品である以上、安全で美味しい」という当たり前のことを実現できるようにという熱い思いが印象的だった。
- 飼料米の取り組みは、地域の農業や農地を守ることに繋がっていることがよく理解できた。単に生産方法や飼料だけに留意した取り組みでなく、地域の産業や消費の循環づくりにつながっている。
- お昼を頂いた「常滑屋」さんの料理のお皿が一人ひとり異なっていたのにはびっくりした。陶器の郷ゆえのこだわりで、扱われている商品にもこだわりがみられ、オンリーワンゆえのリピーターさんが多いのではないかと思えた。
- 「体は『食べたもの』でできている」という言葉。質の良くない食べ物を食べていたら、「体も心もしっかり保てない」と漠然と思っていたことが、この言葉に出会って「その通りだ！！」と心の底から共感。

「ココテラス」⇒<http://www.coco-terrace.com/>

「常滑屋」⇒<http://www.hakurou.com/tokonameya/>

研究フォーラム食と農は、「地域」「市民」「循環」「つながり」「持続可能な農業」「健康な食」をキーワードに東海3県の特徴ある取り組みを探していきます。会員の皆さんと分け合える場も相談していきます。

世話人には地域と協同の研究センター会員であればあなたにも加わっていただけます。問い合わせはお気軽に事務局までどうぞ。

（報告：渡辺 勝弘）

情報 クリップ



メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価/冊数
<p>▶忙しい家庭の食生活を応援</p> <hr/> <p>NAVI 2016.10 No. 775</p> <p>日本生活協同組合連合会</p>	<p>特集忙しい家庭の食生活を応援! CO・OP商品の活用で毎日の食生活を豊かに</p> <p><コープのある風景> コープさが生協 <こんにちは! 生協男子ですっ!> コープあきた 小林慎也さん <元気な店舗の取り組みを学ぶ> とちぎコープ コープ栃木店 <宅配・現場レポート> 生協くまもと ほか <生協大好きママ コプ山さんの 教えて! CO・OP商品> CO・OP コープヌードル香味ねぎみそ <☆突撃☆あなたの町の組合員活動> コープながの <想いをかたちにコープ商品> 第1回「ラブコープ商品 工場・産地交流会」 <私の本ナビ> コープあいづ <エッセイ> 東京⇄パース 小島慶子の8,000キロ通信 空からひとりごと <日本全国ふだんの暮らしを支えたい> いわて生協 <明日の暮らし ささえあう CO・OP 共済> コープこうべ <この人に聴きたい> 女優・タレント 田中律子さん <ほっとnavi> 生協ひろしま CO・OP とやま</p>	<p>2016年 10月 A4版 34頁 定価 360円</p>
<p>▶協同から連帯へ ～協同組合と 社会的経済</p> <hr/> <p>にじ 2016 秋号 第655号</p> <p>一般社団法人JC総研</p>	<p>[オピニオン] 地域で奮闘する小さな鉄道 北川太一 (福井県立大学 教授)</p> <p>[特集] 協同から連帯へ ～協同組合と社会的経済</p> <p><論考編> 連帯の理念・仕組みの類型 津田直則 (桃山学院大学 名誉教授) 協同組合運動はナショナルセンターを必要とする 富沢賢台 (一橋大学 名誉教授) 社会的連帯経済の国際動向 -日本への応用を視野に入れて 廣田裕之 (ワシントン大学大学院 博士課程) 欧州各国の協同組合ナショナルセンターのあり方と今後の方向 -フランス・英国・イタリアの事例から- エンゾ・ベツィーニ (コンフコオペラティーフ・ブリュッセル事務所 元所長/監修 前田健喜・阿高あや) (実践編) 都道府県段階の協同組合間連携の動きと今後の連携強化に向けた示唆 前田健喜 (JC総研 協同組合研究 部長・主任研究員) 協同の力がつくる豊かな地域社会 -広島県協同組合連絡協議会と協同集会を軸に- 岡村信秀 (広島県生活協同組合連合会 代表理事会長) 東海三県における地域と協同活動の持続可能な発展をめざして 向井忍 (NPO 法人 地域と協同の研究センター 専務理事) 福島復興に果たす協同組合間協同の役割と課題 林薫平 (福島大学 特任准教授) 生活クラブ風の村の「地域包括ケア」の取り組み 池田徹 (社会福祉法人生活クラブ 理事長) ICYからナショナルセンターの確立へ -豪・BCCMに学ぶ- 阿高あや (JC総研 副主任研究員)</p> <p>[マスターズ・ロッジ] 若き研究者にマスターズ・ロッジの扉を開く 中川雄一郎 (明治大学 教授・にじ編集員長) 社会的企業におけるリーダーシップに関する分析視角の検討 熊倉ゆりえ (明治大学大学院 博士後期課程) 社会運動によるアプローチからホームレス問題に取り組む社会的企業 -アドボカシー活動が果たす役割とは何か- 菰田レエ也 (一橋大学大学院 博士後期課程)</p>	<p>2016年 秋号 B5版 190頁 定価1600円</p>

	<p>[特別寄稿] 柳田國男の協同組合原則論（I） 堀越芳昭（山梨学院大学 元教授） [連載] 地域発・再生可能エネルギーの取り組み <第6回> 地域の再生可能エネルギーと公益 —市民参加の機能としての協同組合— 上野伸子（産業技術総合開発機構 再生可能エネルギーユニット研究員） [協同のひろば] 第 94 回国際協同組合デー「協同組合：持続可能な未来のために行動する力」 前田健喜（JC 総研 協同組合研究部長・主任研究員） [書評] 池本幸生、松井範惇 編著 『連帯経済とソーシャル・ビジネス—貧困削減、富の再配分のための ケイパビリティ・アプローチ』 田中夏子（社会学[地域社会学、労働社会学、協同組合論]・農） [図書紹介] 泉谷眞実著 『バイオマス静脈流通論 北海道地域農業学研究所学術叢書⑬』 河原林孝由基（農林中金総研 主任研究員） [窓] 消費者の視点から基本計画に取り組む 三谷和央 （日本生協連 政策企画室）</p>	
<p>▶米の需要拡大に向けた 取り組み</p> <p>~~~~~</p> <p>月刊 J A</p> <p>2016. 10 vol. 740</p> <p>全国農業協同組合中央会</p>	<p>特集 米の需要拡大に向けた取り組み 「ふくい朝ごはんキャンペーン」に学ぶ米の需要拡大方策 JA 福井県五連組合員トータルサポートセンター 需要に応じた生産・販売に取り組む JA 全農米穀部 上野千鶴子 オピニオンリーダーに聞く 珍しい大庄屋同盟 童門冬二 きずな春秋 —協同のこころ— JA トップインタビュー 10 年後の農業・地域・JA が元気な姿を目指す 山田泰行（和歌山県 JA 紀の里 代表理事組合長） 展望 JA の進むべき道 金井健（JA 全中常務理事） 水田農業所得の増大のために トピック 30 年産を目途とする生産調整の見直しに向けた JA グループの取り組みと提案 JA 全中農業対策部 海外だより [D.C 通信] 連載 64 遺伝子組み換え食品表示を義務化するアメリカ連邦法の成立 中村岳志</p>	<p>2016 年 10 月 A4版 48 頁 年間予約 5,109 円 (送料・消費 税込)</p>
<p>▶年金を考える</p> <p>~~~~~</p> <p>生活協同組合研究</p> <p>2016. 10 Vol. 489</p> <p>公益財団法人 生協総合研究所</p>	<p>■巻頭言 消費者教育推進法施行から 3 年を迎えて 天野晴子 ▶特集 年金を考える—公的年金制度に対する公平感や不安をめぐって— 自己責任時代における世代間の支え合いの難しさ 浅羽隆史 現行公的年金制度から見た生協組合員の老後生計費：予備的考察 山本克也 変革を迫られる「女性と年金」 —第 3 号被保険者の問題を中心として— 石崎浩 幸福感分析を用いた年金格差の実態 伊多波良雄 高校における年金教育の在り方 阿部公一 コラム 1 年金の不足感を、金融リテラシーの体得につなげるには 坂本綾子 コラム 2 フランスの年金事情 鈴木岳 ■海外情報 バスク協同組合視察報告 山崎由希子 ■時々再録 熊本地震から半年 白水忠隆</p>	<p>2016 年 10 月 72 頁 B5 版 (定価 500 円)</p>

	<p>■本誌特集を読んで（2016・8） 高田公喜・向井忍</p> <p>■新刊紹介 高橋久仁子 『「健康食品」ウソ・ホント「効能・効果」の科学的根拠を検証する』 岩佐透</p> <p>●アジア生協協力基金のご案内</p> <p>●公開研究会 地域ささえあいをどう形成するか</p>	
<p>▶食の安全を脅かす TPP</p> <hr/> <p>文化連情報 2016. 10 No. 463</p> <p>日本文化厚生農業協同組合 連合会</p>	<p>農協組合長インタビュー（32） 農協は助け合い協同する組織である 堀江幸雄 平成27年度文化連会員単協決算分析報告 ～農協「改革」下の経営戦略を 村上一彦</p> <p>院長リレーインタビュー（293） 二次救急と地域の中核病院として 南里泰弘</p> <p>二木学長の医療時評（142） 「ニッポン一億総活躍プラン」と「地域共生社会実現本部」資料を複眼的に読む 二木立</p> <p>2016年夏の参院選をどう見るか(下) TPP、改憲、農政布陣 田代洋一</p> <p>食の安全を脅かす TPP 東公敏 学び続け課題解決できる力を期待 堀内ふき [新連載] アメリカの医療制度（1） 日米医療の比較 高山一夫 韓国農業の実相－日本との比較を通じて（2） 日韓の水田稲作農業の系譜 品川優 臨床倫理メディエーション（5） 医療倫理への検討となる歴史的イベント 中西淑美 農村医学は世直し運動！～私の歩んできた道(19) “啖啄同時、健康教育・健康活動事業 小山和作 [新連載] 平鹿総合病院栄養科の取り組み（1） 様々なメニュー 石山香 第一回西日本地区厚生連医療材料共同購入委員会開催 松本光弘 岡田玲一郎の間歇言（138） 病床機能報告は緩やかな変化があるだろう 岡田玲一郎 デンマーク&世界の地域居住（89） オランダの革新⑩ フォーマルケアをも担うボランティア 松岡洋子 熱帯の自然誌（7）ボルネオ島の住人 安間繁樹 コペンハーゲン・フェレルゴーン デンマーク最大規模の高齢者住宅（2）フェレルゴーンの活動 小磯明</p> <p>●野の風● もの忘れ散歩ができるまちづくり 飯山明美</p> <p>◆平成28年度厚生連院内感染予防対策研修会〈基礎〉開催のお知らせ ◆第3回放射線科医療機器ライフサイクルコスト会議開催のお知らせ ◆第4回厚生連医療メディエーター実践者スキルアップ研修会開催のお知らせ</p> <p>◇各地のニュース □自著を語る 『米の価格・需給と水田農業の課題』 北出俊昭 □書籍紹介 『戦争に巻きこまれた日々を忘れないー日本とアフガニスタンの証言ー』 小磯明</p> <p>▶線路は続く（103） もうすぐお別れ！ 増毛駅 西出健史</p> <p>▶最近みた映画 エル・クラン 菅原育子</p>	<p>2016年 10月 B5版 88頁 文化連情報 編集部 03-3370-2 529 *注</p>

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(✿)などを中心に順不同で紹介しています（主な内容は目次等から事務局が要約しています）。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。

企画案内



人間が輝く平和な社会で若者が生きられるように

「若者を『使い捨て』にする国に未来はない」講演会

いま 若者を食い物にするブラックバイトで、若者が貧困からぬけだせなくさせられています。奨学金返済のために自衛隊に就職する若者も少なくないそうです。社会から強いられた貧困に苦しむ若者に、私たち大人は何をすればいいのでしょうか。

期 日：2016年11月13日(日) 午後1時30分～4時40分

場 所：中京大学センタービル7F 0703教室 地下鉄 八事駅 5番出口すぐ

内 容：講演1「ブラックバイトが日本社会を壊す！」

大内裕和氏(中京大学国際教養学部教授)

講演2「経済的徴兵制が貧しい若者を戦場へ送る」

布施裕二氏(ジャーナリスト『平和新聞』編集長)

参加費：無料

主催：「若者の未来と人権を考える会」(代表 大内裕和氏)

問い合わせ：西 英子さん TEL 052-808-3241

(西さんはカトリック名古屋教区 正義と平和委員会からアロイジオ賞受賞)

書籍案内



おひとりさまの最期
著者：上野千鶴子 単行本：280 ページ
出版社：朝日新聞出版 発売日：2015/11/6 定価：1512 円 (税込)

ベストセラー『おひとりさまの老後』から8年。その後、おひとりさまは増える一方です。著者も親しかった友人の死を身近に経験して、「そうか、死は遠くにあるんじゃない、隣にあるんだ」という気持ちになりました。そして「次はいよいよ私の番だ!」。ではおひとりさまの私はどのように住み慣れた家での「在宅死」ができるのか?ひとりでも「孤独死」とは呼ばれたくない。……
当事者の切実な問いをたずさえて、医療・介護・看護の現場で疑問をなげかけながら、体当たりの取材を積み重ねました。死の臨床の常識は変わり、従来の介護を支える家族は、どうも当てにならないことが実態のようです。本書は「在宅ひとり死」を可能にする現実的な必要条件を多方面に取材し、研究した超高齢社会の必読書です。「在宅ひとり死」のおススメの本です。
朝日新聞出版ホームページより

2016年10月25日発行(毎月25日発行)
定価200円
(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)
発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター
代表理事 西川 幸城
〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39
TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315
E-mail AEL03416@nifty.com
HP http://www.tiiki-kyodo.net/

- 研究センター 11月の活動予定
11月4日(金) 岐阜地域懇談会「ひなたぼっこ」訪問
11月5日(土) 共同購入マイスター⑤
11月7日(月) 国際協同組合デー記念行事準備会、ものづくりの思いを語る会「内堀醸造訪問」①
11月8日(火) ものづくりの思いを語る会「内堀醸造訪問」②
11月9日(水) 国際協同組合デー「医療・介護・福祉分野」相談会
11月11日(金) 暮らしを語りあう会
11月15日(火) 研究フォーラム職員
11月17日(木) NEWS編集委員会
11月19日(土) 政策提言チーム会合
11月25日(金) 協同の未来塾10th
11月26日(土) 生協の(未来の)あり方研究会
11月28日(月) 尾張地域懇談会・世話人会